

産後健診におけるメンタルヘルスケアの重要性

～2週間健診及び1か月健診にエジンバラ産後うつ病質問票と赤ちゃんへの気持ち質問票を導入して～

真田産婦人科麻酔科クリニック

○白石ゆか 小森則子 島ノ江栄子 平川万紀子 平川俊夫

福岡女学院看護大学 福澤雪子

【はじめに】

出産後にメンタルヘルスに不調を来し、育児困難な状況となる母親は少なくない。これらを早期に発見して支援につなげることは産科医療における重要な課題である。産後うつや児童虐待のリスクを早期に見つけるためには産後健診中からのメンタルヘルスケアが重要でないかと考えた。本研究では、退院、2週間健診、1か月健診で、産後うつの指標とされるエジンバラ産後うつ病質問票（以下 EPDS）と赤ちゃんへの情緒的な気持ちの指標とされる赤ちゃんへの気持ち質問票（以下ボンディング）を用いて、出産後のメンタルヘルススクリーニングを行い、その実態を把握し、質問票を用いたスクリーニングの有用性について検討した。

【方法】

平成28年12月21日から平成29年4月3日に当院で出産した母親（外国人、死産、新生児搬送のため母子分離した事例は除く）計210名を対象に、退院時、2週間健診時、1か月健診時にEPDSとボンディングを行い、それぞれの結果と対象者の属性や臨床情報との関連性を比較検討した。

【結果】

1. 2週間健診時でEPDS、ボンディングが高値であれば1か月健診で有意に高値であった。2週間健診でのスクリーニングは母親のメンタルヘルスの変化の早期発見に有用である。但し、途中で点数が低下する例や、2週間健診で低得点でも1か月健診で高得点となる例もあるので1か月健診でのスクリーニングも必要である。
2. EPDSが高得点であれば有意にボンディングも高かった。母親の臨床情報とEPDS及びボンディングの点数に有意な関係は乏しい。

【結論】

産後のメンタルヘルスの推移は様々であった。退院、2週間健診、1か月健診において、エジンバラ産後うつ病質問票と赤ちゃんへの気持ち質問票を用いることは有用であり、早期発見・介入につながる。客観的な尺度を用いてその都度評価することで、母親の変化を早く捉え、対応することが可能になるといえる。また、その客観的指標は多機関の連携や支援機関が移行する際にも、わかりやすい情報提供の手立てとなると考える。